

比較ソーシャルワーク教育史上の「母性」と その「社会的なるもの」の位置づけ

— A. ザロモンのボランティア・グループの事例を通して

岡 田 英己子

<要旨>

比較ソーシャルワーク教育史から見ると、「母性」と福祉職創出の関係は複雑である。女性史/ジェンダー史による「母性」が両義性を持つとの単なる指摘だけでは、「女の職業」としての社会福祉労働と、「女の学問」としての社会福祉理論・実践との、抜き差しならぬ拮抗関係は読み解けないからだ。問われるべきは、両刃の剣になりがちな「母性」を、ソーシャルワーク教育を開拓するフェミニスト達が、理論・実践の中でどう扱ったかであろう。

にもかかわらず、好んで「母性」を多用する日本近現代女性史の影響もあって、ドイツ福祉系大学で用いる一部歴史テキストと同様に、日本のドイツ女性史ではザロモンの初期著作だけを引用して、「母性」言説を福祉職に貼り付ける傾向があったし、今もある。ドイツでも 1990 年代初頭までのザロモン関連研究では、「母性」言説と福祉職を直結する見方では一致していたが、ザロモンの実像はこれとは一線を画する。市民女性の職業自立の手段としてベルリン女子社会事業学校を設立するザロモンは、職業化の論拠に「母性」言説が負の効果を持つことを、身をもって知る世代であった。初期著作を除けば、ザロモン社会事業・教育論に「母性」言説が稀にしか出てこないのは、その証左といえる。男女賃金格差を是認しがちな「女の職業」に抗して、「同一価値労働・同一賃金」の展望に基づき、「女の学問」としての社会福祉理論・実践の突破口を開き、ヨーロッパ大陸型教育モデルの旗振り役を任じるのが彼女である。ザロモン博士論文は、この点で EU ジェンダー政策を先取りするものと位置づけられる。

以上の研究分析結果は、2009 年以降の『人文学報』掲載論稿の小括になる。

本稿ではこれに基づき、ベルリン女子社会事業学校の前身であるボランティア・グループを事例に、ザロモン研究の1970年代以降の動向を再整理し、自己言及的な先行研究分析も取り入れて、「母性」言説を福祉職やソーシャルワーク教育の論拠に多用することの誤りを指摘した。次いで、フェミニズム論を転轍機にして、「社会的なるもの」を具現するザロモン社会事業・教育論の位置づけも示唆した。

＜キーワード＞

A. ザロモン、ザロモン社会事業・教育論、ベルリン女子社会事業学校、第一波フェミニズム、第二波フェミニズム、母性、比較ソーシャルワーク教育史、アリス・ザロモン大学

I. 序

I-1. 戦略としての「母性」言説と福祉職創出の論拠を峻別する必要性

1) 問題意識

「母性」と福祉職の密接な関係は、1970年代半ばから現在に至るまで、欧米でも、日本でも、繰り返し指摘されてきた。今も、そのようなものと受け止められ、不動の見解とされる時もある。その筆頭に来るのが、ドイツ女性史/ジェンダー史であろう。とりわけ日本のドイツ史関連著作では、1980年代から現在に至るまで、「母性主義/母性主義フェミニズム」や「精神的母性」で福祉職創出を説明する頻度は高い。が、果たしてそうなのか。

仔細に見れば、典拠とされる史資料・文献自体が時代の限界を背負っていることに気づく。「精神的母性」を掲げて保育職を他国に先んじて開拓するドイツ語圏では、「母性」を駆使して女性の職業自立の機会拡充を図る戦略が19世紀末から目立つとされる。後追的な歴史テキスト類もそれを支える一翼を担う。こうして同時期にドイツで始まる福祉職創出の論拠にも、保育テキストではお馴染みの「精神的母性」が援用され、今から見れば粗さの目立つ著作(例: Walser[1976]やKickbusch[1977]が皮切りになる)が、1970年代後半から80年代初頭にまずドイツで登場する。

この時期から、1960年代には忘却の彼方にあったザロモンに関心を持つ者が現れる。音頭を取るのは、1970年代末のベルリン夏期大学の研究集会参加者と、アリス・ザロモン大学（当時はベルリン社会福祉大学）教員である。書き手の大半は博士号を持つ第二波フェミニスト。まだ雇用枠に余裕のある福祉系単科大学での採用・昇格を意識して、福祉テーマに引き寄せて論文を書く傾向があったと、今、振り返れば思う（Simmel[1981]; Declerk/Sachße[1981]; Dürkop[1983] 他）。社会福祉専攻・実践歴を持つ書き手は、この時期にはいない。それだけに、I. シュティア（Stoehr[1983]）に代表されるように、第二波フェミニズム運動の高揚感が持ち込まれやすく、ベルリン女子社会事業学校批判に終始するか、逆にザロモン等の「母性」パワーを高く評価をするという二極化傾向があった。

次いで、80年代半ばから単著刊行が始まる（Sachße[1986]; Frevert[1986]）。この時期になると福祉現場経験者もザロモン研究に加わる。例えば、看護師のS. ツェラー（Zeller[1987]）や、戦災孤児にして合衆国ソーシャルワーカー経験を有するJ. ヴィラー（Salomon/Wieler[1983]）等がいる。ここより90年代を通して合衆国（Allen[1991]; Allen[2000]）や、日本でも、似た仮説の下で単著が出て来る。

日本の場合は、西洋教育史テキストでもフレーベル流の「精神的母性」が定番の位置にあるから、ドイツ以上に対人援助職に押しなべて「母性」を張り付けやすいし、福祉職もそうだと誰もがイメージしてしまう。ここに研究者層の薄さと、最新研究動向を単著に反映させ難い条件が重なると¹、孫引きのな見解は読者を通して持続する。当然、研究者側の見直しも進まず、是正も難しい。

しかし、これは福祉職創始者たるザロモンには通用しない。戦略としての「母性」言説と福祉職創出の論拠は、近年のドイツの成果に照らせば峻別を要する。しかし、今も日本では、福祉職創出の論拠に「母性」を駆使したがる。ドイツ語圏ソーシャルワーク教育史への関心の薄さと、先行研究分析の不徹底さが、原因である。が、それ以上に、「母性」とフェミニズムを無頓着に連結させる日本型フェミニズムが、ザロモン像を歪め、福祉職創出の論拠にも悪しき影響を及ぼしている。

ここでの日本型フェミニズムなるものは、上野千鶴子が1980年代半ばに合衆

国で報告・シンポジウムをする際に用いる概念で、当時のフェミニズム論の刊行ブームもあって、「母性主義派フェミニスト」(上野 [1984]105)、「母性主義フェミニズム」(上野 [1984]108; 上野 [1986]127) は²、90 年代(舘・原 [1991]; 吉澤 [1993]13, iii)に入っても引き継がれ、同時に日本型フェミニズムである和製連結語「母性主義フェミニズム」は、ドイツにも転用されていく。この研究動向を問題意識に置きながら、次に本稿の課題と方法を述べる。

2) 課題と方法

日本では邦訳や単著刊行は、ドイツよりも時期的にずれ込むのが通例である。ここに高群逸枝に遡及しうる「女性史学」の仕組みと、主義の文字にふさわしく、「母性主義」を好む土壌が加わると³、「母性」言説一辺倒の福祉職創出の論拠に歯止めがかけにくくなる。この「学」の仕組みを研究史上の素材にして、拙稿も先行研究分析の対象にしながらザロモン研究の四半世紀の動向を辿ること。これが本稿の主課題になる。

具体的には、『人文学報』掲載直後に自身で見つけた M. カウアーの修正(一カ所の翻訳ミスをしていた)も兼ねて(岡田 [2009]12)、若き日のザロモンの活動拠点たる「社会的援助(社会事業)活動のための女性グループ(Mädchen- und Frauen-Gruppen für soziale Hilfsarbeit)」(以下、ボランティア・グループないしはグループと略記)の性格を、研究史上に位置づけ、同時に 2009 年以降の『人文学報』掲載論文を貫く骨子を示すことで、『人文学報』誌上でのザロモン評伝の最終稿としたい。

なお歴史研究が、第二波フェミニズムの見地から第一波を査定した先行研究に依拠して仮説を立てる場合、運動論特有のポレミックさを有する著作が多くなる点には、もっと敏感でありたい⁴。さもなくば、「母性」言説に惑わされて、著作分析も、人物査定も、歪みを持ちやすいからだ。これに関しては、すでに 2009 年以降の『人文学報』で指摘済みであるから、今回は詳述しない。社会事業教育とソーシャルワーク教育の用語は時代と文脈に即して使い分けている。また、煩雑さを避けるために、『人文学報』初出を除き、人名や組織名で定着しているものは邦訳・略称使用を原則とする。

Ⅱ. 「母性」言説の陥穽とザロモン研究動向の概観

Ⅱ-1. 社会福祉（社会事業）史が嵌る「母性」言説の陥穽

1) 「母性」言説の時代背景

まず『人文学報』掲載論文の結論をまとめるならば、次のようになる。ドイツ女性史が多用してきた「母性主義/母性主義フェミニズム」や「精神的母性」は、福祉職創出の論拠にはなりにくいという結論である。それどころか、これだけを強調すると、「女の職業」としての社会福祉労働をフェミニストが容認し、「女の学問」としての社会福祉理論・実践もそれに引きずられたかの如く曲解されかねない。後者の「女の学問」は M. リッチモンドやザロモンがソーシャルワーク教育の理論・実践の支柱と見なすものであるし、前者の「女の職業」はザロモンが苦慮した相方で、当初は容認し、すぐに「母性愛」を標榜すればどうなるかのリスクに自身で気づく。にもかかわらず、層が厚くはない研究領域であるから、ひとたび誤ると是正は意外に難しい⁵。

この種の「母性」言説は、第二波フェミニズムがいわゆる第一波フェミニズムを批判する際に多用された。1980年代に相次いで刊行されるザロモン関連著作も、当時の女性史の主流であった「母性」を分析枠組みに用いる。日本の場合は90年代もそれが続く。この時期に、ドイツ女性史著作の邦訳 (Frevert [1986] = [1990]、訳者は若尾・原田・姫岡・山本・坪郷)、単著刊行が相次ぐからだ (姫岡 [1993]; 若尾 [1996]; 田村 [1998])。いずれも力作であるだけに、その内容に影響を受けたのは、女性史に疎かった筆者一人に留まらないはずだ。しかし、90年代の邦語著作は U. フレーフェルトがそうであるように、いずれも80年代の成果を骨子にしていた。だから、初期ザロモン著作だけの引用であったり、H. ランゲ等の著作の訳出も時に曖昧な「母性」で事足れりとしていた。2000年前後まで、筆者自身がその程度の福祉職創出の論拠で⁶、初期のザロモン社会事業・教育論を位置づけていた⁷。

今は違う。「母性」には両義性があるとか、両刃の剣という指摘だけで済ませるならば、それはソーシャルワーク教育史では致命的な欠陥になるからだ。社会事業・教育論や社会事業学校の内実に踏み込めば、「母性」言説とは噛み合わ

ない種々の事実遭遇する。ドイツ語圏では宗派系の、それも男性が主導権を握り続ける。そこでは日常茶飯事に、「母性愛」と「福祉の心なるもの」が飛び交う。この渦中においてフェミニストとして、市民女性主導の福祉職創出を企図し、それをヨーロッパ大陸社会事業教育モデルとして提示するのが、ザロモンその人であった。

2) 研究動向概観

簡単に、この間の研究動向も記しておこう。筆者がザロモン研究に着手する1970年代半ばは、「母性」と福祉職の密接な関係が歴史系論文によって指摘される前夜に当たる。ザロモンに関してはナチ期の焚書の影響もあり、史資料は不足していたから、自ずと入手できる著作は限定される。

しかも、これは日本近現代女性史にも該当するのだが、新旧女性運動の連続性が欠如する筆頭にドイツは久しくあったし (Kulawik/Sauer[1996]15)、1980年代に限れば北欧やイギリスとは違って、なお国家に対する対峙が目立つのもドイツの女性政策/ジェンダー政策の特徴であった。ここより、第二波フェミニスト世代の非難は、第一波フェミニズムが国家に擦り寄る点に向かい、この見解が1980年代のBDF歴史叙述にも反映されるし、傘下に属するボランティア・グループの性格にも適用される⁸。同時期のイギリスの「家庭の天使」、合衆国の「共和国の母」「市の母」、日本では日本女子大学校社会事業教育で標榜される「母性愛」等々も、ドイツでお馴染みの「精神的母性」と大差はない。いずれも「母性」言説と括られるもので、これらが福祉職創出の論拠に掲げられるのは、ドイツと同様に1970年代後半から80年代にかけてのことである。その時点では斬新な分析視点に思われた。

しかし、当時の研究成果を、即ち、「母性主義/母性主義フェミニズム」や「精神的母性」を、現時点でもなお福祉職創出の論拠とするのは、誤解を招く。

ドイツ語圏では福祉職創出の論拠が、他国以上に「母性」言説の渦中に吞み込まれやすい環境にあったことは確かだ。19世紀末になると、ランゲと懇意の貴族女性も「精神的母性」を語るし、「精神的母性」にアイデンティティを重ねて女性教員の地位を築き上げた古参フェミニスト達も、ザロモンを取り巻いて

いるからだ。ベルリン女子社会事業学校だって、開設当初は「精神的母性」の牙城ベスタロッツ・フレーベル館に間借りをする有様。これら旧態依然とした「母性」好きの言説空間を見据えながら、ザロモンは学生と実習先にボランティアではない専門的な社会事業教育とは何かを示さねばならない⁹。保母職よりも専門性が高く、「エリート」女性の職業自立に適う福祉職をザロモンが目ざすならば、である。

社会事業教育の援助論や実習は、複雑な対人援助の事例を取り扱う。歯切れの良さと分かりやすさが身上の運動論の世界とは異なる。いかにして、教条主義的な「母性」言説から、脱することができるのか。これがザロモン社会事業・教育論の喫緊の課題になるのは、1917年頃である。福祉職資格制度の論議が始まるからで、数の上では多数派を占める宗派系社会事業学校を取り込むべく苦慮もする。それだけに、宗派系学校の男性指導者が放つ「母性」言説に対抗するには、全面対決は回避しながら「母性」を換骨奪胎する形で、「社会的なるもの」を具現する社会事業・教育論を編むしかない。ザロモンの執筆姿勢が変化するの、この時からである。

II-2. ザロモン研究動向から浮上するもの

1) フェミニズム論の歴史研究の欠如と「社会的なるもの」への関心の薄さ

つまり、フェミニズム論のポリティクスが、1970年代後半から80年代の女性史研究を浸食する点を、もっと意識すべきなのである。ザロモンやBDFの研究史的位置づけから浮上する問題は、第二波フェミニズムが見たいと欲した第一派の描き方であり、そのツケの大きさである。「母性」言説を過剰に引用し、読み手が「母性」言説でもって討議をし、ザロモン査定をしていくという「学」の偏った仕組みはここから構築されるのだから。

これに関しては栗原涼子『アメリカの第一波フェミニズム運動史』の次の指摘が参考になる。「現代の政治が女性史の解釈を常に変更するものであるがゆえに、女性運動と女性史研究の相互補完関係を重視」すると栗原のデュボイス書評は(栗原[2009]337; 初出[2002], 傍点筆者)、自著も批判対象に含める先行研究分析の意味を教えてくれる。デュボイス(Dubois[1978]; Dubois[1998])と

同様に、栗原自身も同一テーマを追求し、この間の歴史解釈の変化も描き切る(栗原 [1993]; 栗原 [2009])。翻ってドイツの女性史・社会福祉(社会事業)史の研究領域に眼を転じると、同一著者による、同一テーマでの見解修正に至るような長期展望を持つ刊行はない。

イギリス女性史の場合は、少し事情が異なる。イギリス女性労働者団体がいわゆる差異派の影響を受けていても、原則「同一労働・同一賃金」を優先する土壤があるからだろう(今井 [1992]9)。生活者の目線で「社会的なるもの」を理論・実践に導く貧困調査では、19世紀半ばから他国を先導するし、社会政策・救貧法でも豊富な研究蓄積がある。これは、後述するがグループ結成時に重視される女性労働問題への関心や、ザロモン博士論文の「同一価値労働・同一賃金」の社会政策提言にも反映される。イギリス的な「社会的なるもの」に関心を持つ一群が、グループ結成を支援しているからだ。この国際比較に着手する者はまだいないのは残念なのだが。

2) EU ジェンダー政策とザロモン像再考

むしろ 1980 年代のドイツ女性政策は、北欧のジェンダー平等への取り組みと比べれば、政策の不整合さが目立つ。1980 年代に限れば北欧やイギリスとは違って、なお国家への対峙が目立つのがドイツであった。保守政権下では、女性政策と女性学研究とは分裂気味であり(Kulawik[1996]49)、そこに「福祉国家の失敗」が語られ、「女性の貧困化」がメディアで取り沙汰される。方や、フェミニズム論の動きはというと、1970 年代後半のベルリン夏期大学等の改革論議を引き継ぎ、ケアの担い手たる女性の現実問題に苛立ち、それが家庭擁護の主張に時に重なっていく。この政治情勢を反映して、女性史テーマにも偏りが起こる。1980 年代のドイツ女性史は市民女性団体に集中し、女性運動の総体を「母性」言説で括る傾向を強めていくからだ。

ザロモン・ブームが 1980 年代半ばから起こるのも、この脈絡で見ればよく理解できる。新旧女性運動の連続性が欠如したままのドイツでは(Kulawik/Sauer[1996]15)、1970 年代半ばから 80 年代の第二波フェミニスト世代の手による女性史自体にも歪みが出やすい。そこでの通史は、ヴァイマル期は概観にす

ぎず、1945 年以降はないに等しかった。両大戦間期にフェミニズム運動は活力をなくすとの指摘はするが、同時に 1920 年代以降も「母性」言説が女性団体全般に当てはまるかのごとき記載で済みます¹⁰。これではザロモン像に張り付く「母性」は剥がせない。そこに初めてメスを入れるのが、I. シュレーダー (Schröder[1994]) であろう。

それだけにザロモン研究では、1970 年代後半から 90 年代初頭の第二波フェミニズムの影響下での著作類と、「政治が女性史の解釈を常に変更する」ことが意識できる書き手による 90 年代半ばからの成果 (Schröder[1994] 以降と言っよう) とは、峻別すべきである。1990 年代に大々的に推進される EU ジェンダー政策の最中で博士論文を準備する後者の研究者達は、「母性」言説一辺倒ではないザロモン像がイメージしやすかったのだ。これに即して、巻末の文献リストでも、拙稿を二期に分けて列挙した。

Ⅲ. A. ザロモン研究史上のボランティア・グループの性格

それでは、グループの話に入っていこう。

2009 年以降の『人文学報』拙稿で、ザロモン像を描くに際して看過できない対象としてきたのが、初期活動の拠点になるボランティア・グループの性格である。これまでのザロモン研究は、彼女を穏健派ないしは保守派とする論拠に、常にといいほど、次の箇所を引き合いに出してきた。グループ創設時の「呼びかけ」の「ただしどんな“女性解放”への目的追求もここでは取り扱わない」(Programm[1895]; Salomon[1913]8, 傍点筆者) の文言だ。

Ⅲ-1. 「呼びかけ」とその時代状況 — 概観

1893 年 12 月、市役所の集會に 50 数名の女性が集う。「呼びかけ」ビラを手に参加するザロモンもその一人で、ほどなく活動に身を投じ、社会事業教育の開拓者へと邁進していく。「母性」からは切り離された「社会的なるもの」を知性と感覚を総動員して学べる場がそこにはあった。優れた指導者との出会い、「より良き社会」を目ざす仲間、社会の実相を学べる女性向け教育。三拍子揃って

いたのである！

が、実は「呼びかけ」ビラには、不可解な箇所が散見される。フェミニストが宣揚する「呼びかけ」なのかと思う奇妙な文言もあるからだ。まずは「呼びかけ」の紹介から入っていこう。太字は原文のママ、訳補足の〔 〕と傍点は筆者による。

1) 「呼びかけ」の概要紹介

「祖国の多くの人々の経済的文化的な窮状、さらに広く国民の中に増大しつつある憤懣。このような状況を鑑みて、今こそ女性の方々に呼びかけたいのです。社会事業活動 (soziale Hilfstätigkeit) を是非ともしていただきたいと。有産階級の女性には、とりわけ若い女性には、無産階層が何を感じ、どんな体験をしているのかに対する関心も理解も不足しているのです。これらの人々との個人的な交流もないからで、これが憤懣たる状況を増幅させているのです。事の重大性を見誤ってはいけません。重くのしかかる共同責任が〔ドイツ女性に〕あるということ。

ここに事態打開のために手を打たねばならないのです……。とはいってもこれを実践に移すには、大都市のような状況では非常な困難にぶつかるものです。それだからこそ、切に組織化された行動が必要とされるのです。

ただしどんな“女性解放”への目的追求もここでは取り扱いません。女性の方々が、とりわけ若い方が、**全体への奉仕という真摯な義務の遂行**に参列していくということが、大切なのです。

幅広い原則に立つ一つの組織が、社会事業協会関係 (Wohlfahrtsinstitute) の指導者の協力のもとに、多数のベルリンの女性達によって計画されております。講義による理論的な教育と、実践活動とが意図されています。

実践に重きを置いております。実践とは青少年のための社会事業機関・施設 (Wohlfahrtseinrichtung) —— 託児所 (Krippe)、少年少女学童保育所 (Knaben - und Mädchenhort)、幼稚園 (Volkskindergarten)、孤児院 (Waisenhaus)、貧民救済施設 (Anstalt der Armenpflege)、貧民給食所 (Volksküche)、病院等の中での活動の中に存するものなのです。それは、別のやり方の社会事業活動——援助を

必要とする家族への個別的な援助等——と同じものなのです。それぞれの活動の一つ一つを皆さんに示すために、円熟した年代の女性が確保されております。皆さん方の協力の範囲は、利用できる時間の程度を、基準としなければならないと思います。それ以上の活動をする場合は、個々人の好みと能力とに任せたいと思います。

理論面の教育に関しては、無用の長物のようなものを新たに教える女性教育ではありません。講義が自己目的になってはいけません。講義は、思慮ある、計画的な実践活動をしてみたいと、受講する方々を喚起させていく目的のための手段なのです。この観点に基づいて、生きた具体的な体験が提供されるようにしたいと思います。経済・社会との関連についての分かりやすい講義は、公私社会事業機関・施設の場での参観と可能な限り結びつけて、行われることでしょう。さらに、将来的には、公衆衛生とか、それに類するものについての有用な知見も提供されるべきでしょう。多数の経験豊かな専門家が、講義を引き受けてもいいと快諾して下さっています……」(Programm[1895/96]; Salomon [1913]8-9)。

この「呼びかけ」はグループの立ち位置を対外的に示すもので、広報用の小冊子や年次報告に幾度も登場する。グループ創設 20 年目の 1913 年に刊行される『社会事業活動の 20 年 (Zwanzig Jahre Soziale Hilfsarbeit)』でも、これが出される (Salomon[1913]8-9)。「呼びかけ」の活動方針は明快そのもの。慈善ではなく、アングロ・サクソン系博愛事業に倣ってボランティア活動拡充を目ざし、同時に「無用の長物のよう」なお嬢様の教養教育ではない専門的知見を授ける講習会に比重を置くものであった。

2) 「呼びかけ」を是認した二人のフェミニスト

「呼びかけ」は、1880 年代から 90 年代初頭の、「より良き社会」を目ざすドイツ社会改良運動の到達点を示すもので、ベルリン在住のフェミニスト達が連帯して結成する市民主導型ボランティア組織であった。だから、「呼びかけ」には、「手助けがほしいから人集めを」のニュアンスはない。「志ある女性たちよ、

グループに結集せよ」が真意に近い。それだけに奇妙な文言が気になる。「ただしどんな“女性解放”への目的追求もここでは取り扱わない」(原文は太字、原則「女性解放は取り扱わない」と以下は記す)の一文だ。

グループ創設にはリベラル左派フェミニストの代表格カウアーが熱心に関与するだけに、余計に奇妙に感じる。社会主義女性団体も時にしり込みする程に勇ましいカウアーが、こんな「呼びかけ」に納得したのかと。むろん、創設に同じく尽力し、ほどなくザロモンの師匠格になるシュヴェーリンだって、カウアーに匹敵する生粋のフェミニスト。両名は女性参政権にも熱意を持っていた。

第一次世界大戦から公私社会事業は行政官僚・国家主導の手で再編される段階に突入する。これに先立って、シュヴェーリンは今日的な意味合いの自治体行政との協働を1897年から開始する¹¹。1914年には「ベルリンの総合的な民間社会事業改革はシュヴェーリン夫人に負っている(Berlin verdankt ihr eine umfassend Reform der privaten Wohltätigkeit)」(Solden[1914]209, Zitat von Maier[1998]544)と絶賛される。行政および施設・機関と、グループ・メンバーとの緊密な協働は、シュヴェーリンの死後もザロモンに引き継がれる。現在でもソーシャルワーク関係者のヒアリングをすると、「ここはソー・シャル・ベルリンなのだから」(傍点筆者)と誇らしげに語る人がいるのは、19世紀末の「社会的なるもの」の息吹がベルリンには継承されていることを、講義や歴史テキストから学んでいるからであろう。

III-2. 「女性解放は取り扱わない」文言をめぐる本音と建前

1) ザロモン像再考の手がかり ― 二種類の「呼びかけ」文書

先の「呼びかけ」ビラの疑問に入っていこう。これは21歳のザロモンが鬱々と時を過ごす生活から、「社会的援助(社会事業)活動のための女性グループ」の設立集会に興味を持ち、1893年にベルリン市役所を訪ねる際に読み、参加を決めた「呼びかけ」ビラである。額面どおりに読めば、ザロモンは穏健派どころか、保守派フェミニストになるような内容である。「呼びかけ」ビラのど真ん中に、グループは「ただしどんな“女性解放”への目的追求もここでは取り扱わない」とされ、しかも、そこが太字で印刷されているからだ(岡田[2009]9-10)。

さらに 1913 年刊行のグループ創設 20 周年冊子にもこれは再掲される。

しかし、なのである。実はグループには別の「呼びかけ」があった。それに筆者が気づくのは 2005 年夏。21 歳のザロモンが相談業務の活動に初めて入る、ツィーゲル街の一室でベルリン女子社会事業学校とグループの年次プログラムと年次報告書を通読した時である¹²。一行文が削除されていた。もう一つの「呼びかけ」文書があったのだ。一体、どう考えたらいいのか。単なる誤植なのか、それとも。

この文書発見は、評伝執筆の弾みとなった。ザロモン評価がほぼ出尽くし、ザロモン文書館で著作集第 1 巻が刊行される 1997 年以降においても、シュティア (Stoehr[1997]) や、ザロモン伝記を書いた C. クールマン (Kuhlmann[2000]) ですら、これを見逃していたからだ。文書館の公開作業の遅滞があったとはいえ、ドイツに居れば少しの努力で収集はできるのだから、全文通読を怠ったことが原因と考えてよからう。それだけに、この文書は従来のザロモン像に再考を迫る素材になりうる。

2) 通読が看過された理由と文書の変遷

1893 年暮れにザロモンが入手した「呼びかけ」ビラには、「女性解放は取り扱わない」の一行がある。年次プログラムの主たる読者は、グループ会員である。初期グループのメンバーは顔見知りしに声かけして加入を促しているから、「良家の子女」ばかりなのだが、女性の自立には関心は高かった。有能と見なされる人ほどそうである。

設立から 2 年を過ぎる時点で、「女性解放は取り扱わない」の行が削除される。1896/97 年の報告冊子 (Monatsprogramme der Mädchen- und Frauengruppen für soziale Hilfsarbeit) からである。以後、1907/1908 年ベルリン女子社会事業学校設立準備過程でグループの性格が変化を余儀なくされるまで、この削除された「呼びかけ」文書が各年次プログラムには記される。太字の強調箇所は年度によって微妙に違う。やがて、1898/99 年以降は、「呼びかけ」のどこにも太字はなくなる。もう「女性解放」云々を強調する必要もないと見たのか。

つまり、グループ創設後、ほどなくして、「女性解放」云々を削除した文書が、

出て来る。ザロモンがベルリン市役所におずおずと赴く際に、手にしていた文書とは違うのだ。二種類の「呼びかけ」の存在は一体、何を物語るのか。偶然か、故意か。印刷ミスではなさそうだ。とするならば、少なくとも内部会員向けに、そうしたと解するのが妥当だろう。にもかかわらず、1913 年刊行の 20 周年冊子には、最初の「女性解放は何ら扱わない」が再録される。ザロモンが几帳面さを発揮して、原文に忠実であろうとしたからか。あるいは、グループとの出会いこそ自分の人生を決したとの思い入れの強さから、20 年後のグループ活動の総括となる冊子にも、黒字で強調した「女性解放は取り扱わない」の方の文書を掲載するのであろうか。

これらの疑問を手がかりに、若き日に彼女がグループで見聞するフェミニストたる立ち位置を、卑近な言い方をすれば処世術の学び方を見ていこう。

3) なぜ、「呼びかけ」文書を使い分けたのか — 効果的な学習教材

まずは、二種の「呼びかけ」の疑問解明に入っていこう。

「ただしどんな“女性解放”への目的追求もここでは取り扱わない」の一行が削除されたり、再登場するのは、なぜなのかについてである。

入会して程なくして、二種類の「呼びかけ」を知り、眼を丸くしたのであろうザロモン。「これって、一体、どういうこと」と興味を持ったはずだ。新米ボランティア募集では女性解放はご法度と記したビラを用いて、入会勧誘をする。時期を見て年次報告冊子を見せる。「穏健に見せないと、まずいからね」との説明をザロモンも受け、ザロモン自身がさらに後輩に伝える。グループの講習会は初年度を除き、なかなか軌道に乗らないだけに、会員有志の本音トークは、女性が社会で発言権を持ちたければ「賢くあれ」を学ぶ良き機会であった。

これは「妥協が何のためにあるのか」を学ばせる生きた教材であり、女性固有の領域をと言いつつ、公的救貧行政を皮切りに社会行政に進出し、同権を獲得すると言う冷徹な戦略であって、従来の請願運動よりも一歩先を行く。

1893 年にザロモンはグループに入会するが、その頃はまだ穏健派 vs ラディカル派という腑分けはなかった。グループ結成を脇から支える BDF 幹部も、48 年革命の初期フェミニズムの敗退の記憶が想起でき、1860 年代には女性教育や

幼児教育の学校・施設経営をしてきた経験者が多いだけに、チャンスには敏感であった。グループ文書が二枚舌であってもかまわない。それすら学習教材にして、職業自立を勝ち取るのだとの気概に溢れた一群がグループ結成に集っていたのである。

そもそも、1974年に修士論文準備のためにザロモンの秘書を務めたD. ペイゼラーの伝記を読んだ時から、かすかにおかしさを感じた箇所が、「女性解放は取り扱わない」であった(Peyser[1958]20)。だから、「女性解放」云々の文言が省かれたものが内部に出回るのは、カウアーやシュヴェーリンの生き方に即するもので、ある意味で当然の帰結といえる。「反」フェミニズムの攻勢に屈せず、過剰な批判を巧みに回避しながら、女性の社会進出の機会拡充を図る。この両立作戦は、やがてBDFと国際女性評議会(ICW)との国際組織間を繋ぐ渉外担当で生かされる。本音が出せない国際組織で、一方の立場から非難をするのではなく、実務に徹しつつ建前との溝を埋めるのがザロモンであるからだ。

ただし「女性解放は取り扱わない」は、Ⅳ章でさらに言及するが、ザロモンを穏健派あるいは保守派と規定するにはぴたりの引用箇所でもある。事実、1980年代初頭のザロモンの短い伝記類ではこれが常に紹介され、以後の研究にも踏襲され、ザロモン像を大きく歪めていく元凶になるのである。

Ⅲ－3. 文書の使い分けのその後

1) グループ20周年冊子にも継承される戦略

つまり、二種類の文書の使い分けはザロモンも周知済み。にもかかわらず、グループ20周年冊子には最初の文書を載せる(Salomon[1913]8-9)。最初の「呼びかけ」にカウアーやシュヴェーリンは気が染まなかったかのように1913年時点では記すが(Salomon[1913]99-100)、「呼びかけ」が二種類あった点には一切ふれない。グループの内実を知らせたくないのか。それとも、「女性解放は取り扱わない」との学校前史の歴史性を掲れば、良家子女の参加に際しての親の不安感はなくなるのだからと、割り切っていたのか。それもあるだろう。が、それ以上に、1893年からの「慈善・博愛事業から社会事業」への20年間の変化を対比的に描こうとしたのだと思う。というのは、20周年冊子の結びに社会的

公正を掲げるからで (Salomon[1913]110)、「社会的なるもの」が政策に反映される時代の到来を若い世代に、わかりやすく示す意図が勝っていたようだ。

そもそも、ザロモンが1902年に刊行する最初の単著は、若い女性のオルグ本。執筆で金を稼ぐことを覚えるが、同時に自著を「糊と鋏の切り貼り」「編纂風のもの」と、批判できる醒めた眼もすでに持つ (Salomon[1928])。にもかかわらず、1902年から1912年頃までは、BDF擁護のエッセイ風フェミニズム論はせっせと書き続ける。関係各位やメディアに受け入れられる好機は、グループとベルリン女子社会事業学校のためにも、無駄にしたいくはない。真面目な仕事ぶりである。

2) 持続する確執

さらに、女性組織の人間関係は結構狭いだけに、カウアーとの確執も持続するのではないか。双方が対峙するというよりも、周囲が面白半分で噂をたてたがる。これもグループの最初の「呼びかけ」が20年史に再掲される一因のように思う。

イデオロギーを振りかざす社会民主党やラディカル・フェミニストに対して、BDF擁護の役回りを引き受けてきたザロモンの語り口は、グループ20年史の総括にも滲み出る。1910年開催のハイデルベルク大会のグループ活動報告では、ドイツ全土のボランティア組織を掌握済みかの如きトーンで語り、宗派を超える全国網を目ざすとする (Salomon[1913]32-39)。若い女性向けのアジ演説は見事で (Salomon[1913]6)、カリスマ性があったのも肯ける。が、初期リーダーとしてのカウアーの名前をあげながらも (Salomon[1913]5)、20周年冊子では創設事情の詳述は避けたがる。なぜなのか。

カウアーの手によるベルリンの女性福祉協会25周年冊子も、同じ年の1913年に刊行される (Cauer[1913])。両名のライヴァル意識はここで再燃するのではないか。両名が共に大事にしてきた活動拠点の記録。準備段階で双方の共通の知人から、刊行計画は漏れる。ややあけすなカウアーの性格を知るだけに、ザロモンは慎重に対処せざるをえない。「穏健派って何と臆病なの……我々進取派は獲得できようができませんが、前進するわ」 (Cauer[1913]14)。カウアーの25年史の語り口は相変わらず勇ましい。1898年秋、心許す女友達にカウアー追い出し策を披露し、カウアーの直情的な性格は把握済みのザロモンが、こんな挑発

に乗るはずもない。グループの最初の「呼びかけ」を堂々と出し、「そうよ、あなたの言う通りの臆病者よ」と応える。カウアー相手にはこれが得策との読みはザロモンならばするだろう。

カウアーは1922年に亡くなる。家族を相次いで失う悲運をバネにフェミニストになる彼女の追悼記(Lüders[1925])を、1925年にE. リュダース(Lüders, Elizabeth)が刊行。ザロモンは、翌1926年に執筆する自叙伝で、初めて次のように述べる。「この際にはっきり言うておきます」「私がグループを設立したのではない」と(Salomon[1928], Zitat von Feustel, Ausgew. Schr., Bd.3, 389)。周りの「誰がグループを結成したの」式の噂を払拭しなかったようだ。嘘をつくタイプではない。だが、1898年秋の私信でのカイアー批判のやり方から見れば、駆け引きはここでもあると思う。噂を鎮めるには、死者に鞭を打たない対応がいいと判断したのであろう。

3) グループの全国展開を目ざすザロモン — 高揚感と危うさ

グループ叙述は高揚感に満ち満ちている。これをモデルに、類似のボランティア・グループの全国展開を目ざすとしているからだ。

だが、戦時期から始まり、ヴァイマル期には低迷するグループのその後について、ザロモンは寡黙なままだ。だから、ここにも彼女の執筆姿勢に偏在があるのではとの、疑問が沸く。グループ活動の成功がザロモン出世のきっかけになった。グループは1898年にBDFに加入し、翌1899年4月に『女性運動(Die Frauenbewegung)』刊行が始まり、実質、これはグループ機関誌になる(Salomon[1913]102-103)。ザロモンはグループの「呼びかけ」文書で学習済みだから、同じ戦略でもってグループの全国拡大の機運を演出したのではないか。本来の目的は、BDF次期会長就任であり、同時にベルリン女子社会事業学校モデルの全国制覇を狙う時期でもあったからだ。定職に就く期間が短かったボーイマーがそのようなのだが、BDF会長職は一種の名誉職で、安定した収入はそこから望めないから、ザロモンが二股をかけるのは当然なのだ。

1910年のハイデルベルクでのグループの全国結集は、BDF年次総会開催に合わせたものがあった(Salomon[1913]92)¹³。大規模学会開催に合わせ、分科会的に

開く手法である。だから、自分がBDFを脱会するとグループ結集大会もできなくなることは熟知していた。そもそも、ベルリンのグループとその姉妹組織と目される地方との関係は、ザロモンが言う程には緊密ではない。ザロモンが20周年冊子にそう描くから、あたかもボランティア組織の全国網があるかのように読めるだけなのだ。ハンブルクのようにグループをモデルに成功するケースもあるが、上手いいかない組織も多い。姉妹組織と括られる、その多くが宗派系ないしは男性支配下に置かれている (Salomon[1913]96-97)。グループ20周年冊子はこの点でも、フェミニストによるプロパガンダの書といえる。

以上、初期グループがフェミニズム穏健派の拠点とはいいい難い側面を見てきた。宗派の壁を超え、慈善ではない、世俗化された対人援助職が希求される時代を読み取るのがグループであり、その活動を全国展開させるための場所貸しをするのがBDFであった¹⁴。その言説操作のしたたかに、ドイツ女性運動の成熟ぶりを見る。

IV. グループの位置づけから見えてくる研究動向

つまり、グループ創設時の「呼びかけ」の「ただしどんな“女性解放”への目的追求もここでは取り扱わない」(Programm[1895];Salomon[1913]8)の文言に依拠するザロモン研究は、ドイツでは1980年前後に広まり、日本では90年代に定着する。女性解放を回避するから、穏健派ないしは保守派と解され、グループの性格とザロモン像とを一枚岩的に見なし、論拠としてザロモン初期著作の引用を貼りつける著作類が刊行されていく。

以下では、こうしたグループの性格づけを素材にして、その研究史上の位置を査定しておこう。

IV-1. ドイツの場合

1) 女性史 / ジェンダー史の見解

グループの位置づけは、シュティアの1997年見解でも、「呼びかけ」の「女

性解放を取り扱わない」が引用参照され、グループとザロモンの穏健派ぶりが強調される。シュティアはベルリン地域女性史の第一人者でもあるから、その査定は間違いないと思っていた。だが、当時はまだザロモン文書館の収集作業は途上にあり、よほどの関心がないとグループの一次史料を通観したいとは思わないだろう。また社会主義陣営との二項対立的なフェミニズム論からは脱却してはいても、第二波フェミニズムの息吹を紡ぎ出したシュティア世代にとっては、第一波フェミニズムの「母性」イメージ払拭は容易ではない。周辺に居る市井の女性史研究者の場合は、見解是正の必要を感じにくいし、研究職に就かない場合は数十年分の先行研究・史資料を読破する環境も確保し難い。こうしてカウアーが創設準備に関わるのが重視されずに、Chr. ザクセやフレーフェルト等の著作を読み回し、ザロモンやグループを第一波フェミニズムの典型とする見解が内輪でまず定着する¹⁵。続くザロモン・ブームでは、さらに後追的な追認は目立つ。

研究としてはやはり問題が多い。この「学」の仕組みの解体作業は、つまりフェミニズム論の定義の権力と曖昧さを修正する機会は、第二波フェミニスト世代の内輪で議論を重ねても出にくいからだ。

2) 社会福祉（社会事業）史の見解

アリス・ザロモン大学側の「正統派の歴史」も、ここで見ておこう。学内統括の地位にあった R. ランドウェア (Landwehr, Rolf) は、1981 年にザロモン研究では初期の論稿と言える『アリス・ザロモンとその社会事業の意義 (Alice Salomon und ihre Bedeutung für die soziale Arbeit)』(Landwehr[1981]) を執筆、「女性解放」の文言は赤と同じ意味と多くの市民にはその頃は思い込まれていた……だから慎重な姿勢にグループはなった……ようやく 10 年たってから、そうした考慮は取り払われ、『女性運動の予備校 (Vorschule der Frauenbewegung)』(Salomon[1913]104) と明記されるに至った」(Landwehr[1991]28) と記す。

実際には 10 年たってからではない。グループ結成 2 年目を過ぎた頃の「呼びかけ」には、もう女性解放云々の文言はない。内輪では「男性社会に抗するには使い分けも必要よ」的な学習教材に「呼びかけ」がなったはずだ。が、ラン

ドウェア見解が、1980年代のザロモン研究を制覇する。「女性解放を取り扱わない」箇所だけが、当時は強調される。けれども、Ⅲで述べたように、それ自体がフェミニズム戦略であったならば、全く別の解釈が可能になる。

1980年代に引き続き、1990年代以降もザロモン大学によるシンポジウム・研究集会や演習の場で、「ザロモンがいか程のフェミニストなのか」が頻繁に争点にされる。演習等で、異口同音に出てくるのは、「呼びかけ」の「女性解放を取り扱わない」箇所と、ランドヴェアの「ようやく10年たってから……考慮は取り払われ、『女性運動の予備校』(Salomon[1913a]104)と」明記された箇所であった。ザロモンをフェミニストと見なす人であれ、ザロモンを保守派と批判する人であれ、文言を根拠に「女性解放」路線から距離を置くとグループ査定では一致する。が、それ以上の踏み込んだ「呼びかけ」文書の検討はなかったのである。

要するに、これまでのザロモン研究は、グループ結成時の会員集めの「呼びかけ」ビラの「女性解放を取り扱わない」に依拠して、若き日のザロモンを査定して、それを福祉職創出の論拠に援用する傾向があった。ここより「高すぎる評価 vs 低すぎる評価」に二極化する位置づけが出てくる。「女性解放を取り扱わない」を額面通りに読めば、グループやザロモンは保守派にもなりうるからだ。だが、「女性解放なんて、とんでもない」とする「反」フェミニズムとは違う。どちらかといえば、低い評価は女性史・フェミニズム論を扱う社会学系列の専攻者に多く¹⁶、高い評価は社会福祉・社会教育学専攻者に偏る。

Ⅳ－2. 日本の場合 — 社会福祉（社会事業）史との接点のなさ

1) 日本型フェミニズムたる母性主義フェミニズム

女性史と社会福祉（社会事業）史の関係は、日本でも状況は似ている。「母性主義」標榜は高群を筆頭に以前からあった。「母性主義フェミニズム」の方は、どうも上野千鶴子が日本型フェミニズムとして提起することで（上野[1984]；上野[1986]）、広まるようだ。この点では和製連結語と言わざるを得ない。連結によって、欧米フェミニズム論と差異化するとアイディアは上野らしい。この種の定義の権力と曖昧さが同居するフェミニズム論は1980年代に大量生産さ

れ、女性史に新規参入する研究集団にも大きな影響を与えた。日本型フェミニズムとしての「母性主義 / 母性主義フェミニズム」は、同時期の「新しい女性史」の取り組みにも及び¹⁷、その魅力的な言葉づかいの故に、ドイツ女性史にも適用されていく。むろん、個別史ではなく、通史的叙述の女性史ならばランゲ他の原典解読も含めて、「母性」言説一辺倒で査定しても余り問題はないだろう。

が、社会福祉（社会事業）史、とりわけ福祉職創出がメーンに來るドイツ語圏ソーシャルワーク教育史となると、話は別だ。「母性主義 / 母性主義フェミニズム」や「精神的母性」に依拠して、社会事業・教育論を読もうとすれば矛盾が発生する。今から振り返れば、コロンブスの卵のような「学」の仕組みであり、「母性」言説の陥穽に嵌っていたように思われる。女性学からフェミニズム論へ、さらにジェンダー論へと、1970年代後半から1990年代にかけてメディアで主流となる言葉遣いを追うと、その寿命の短さに驚きを禁じ得ないのだが、1976年に修士論文を書き、それに基づき1985年に「母性主義的フェミニズム」（岡田 [1985] 112, 124）を用いるのも¹⁸、時代の流れであったと思う。当時の筆者はフェミニズム論には無関心で、論壇の動きには気づかない。だから、母性とフェミニズムの和製連結語のリスクに気づくのは、2000年頃という有様。研究史上に自身の論稿を位置づける作業も、それが歴史研究ならば時間はかかる。結局、筆者の力不足もあり、四半世紀を費やす羽目になる。今となっては、どこから「母性主義的フェミニズム」を引っ張り出したかは不明である。が、ここにこそ、典型的な和製連結語の陥穽があり、日本型フェミニズムなるものの歴史研究の脆弱さがあると、自己言及的に先行研究を分析している。

そもそもツェトキンでさえ賞賛するシュヴェーリンが、グループ結成準備に入るのは1892年。1899年に夭逝するシュヴェーリンの個人記録は少ないから、これは推察の域を出ないのだが、未組織女性労働者・家内労働者に関心を持ち、ベルリン市内にセツルメントや相談所を設け、そこに訓練されたボランティア女性を相談員で配置する構想を、グループ創設時から抱いていたようだ。シュヴェーリンがグループ活動をする1890年代半ばは、イギリスでも女性労働者の組織化は遅れていた。労働組合主義では女性労働者問題の解決には結びつきにくく、部外者たる男性が女性労働者の組織化支援をするべきとの女性労働組合

連盟 (Women's Trade Union League: WTUL) 見解も出る (今井 [1992]183)。両国の工業化・都市化の進捗状況はほぼ同じだから、市民女性主導 (夫とその知己が支援する形) による女性労働者組織化という発想も似る。

ちなみに B. ウェッヴと出会い、その母性保護不要論にザロモンが失望するのは、労働党 (1906 年) やフェビアン協会女性部 (1908 年) 結成前の 1899 年の出来事であり、以後は同協会女性部が理論的支柱になって母性手当を要求する (今井 [1992]367-373)。1910 年同協会セミナーで、ドイツ・オーストリアの母性手当が進んでいるとの情報紹介がされる。同時に、手当は家庭の主婦にも支給されるべきだとして、ドイツが「女性を母としてではなく労働者とみなしている点を批判」するメンバーも出て来る (今井 [1992]371)。時と場に応じて、多様な文脈で使い回される「母性」言説の一例と言える¹⁹。

2) 日本のドイツ女性史とイギリス女性史の温度差

さらに日本のドイツ女性史をイギリスや合衆国の動向と対比すると、「母性」言説の取り扱い方に温度差があることに気づく。青木書店から 2000 年代後半に刊行される女性史/ジェンダー史シリーズを比較すると、索引に「母性」が多いのがドイツ (姫岡・川越 [2009])、次いで合衆国 (有賀・小檜山 [2010]) になる。イギリス女性史はフェミニズムが多く、「社会派」フェミニズムの項目も一つだけある (今井・河村 [2006])。章立てはイギリスとドイツは似ている。内容に入ると、イギリス女性史も母性保護や女性労働者問題を扱う点では、ドイツと同じだが、それは 20 世紀初頭からウェッヴ夫妻やフェビアン協会が始める社会政策・救貧法史の研究蓄積の一環に位置する。むしろ過去の社会政策関連の歴史は大半が男性の視点で書かれたとの非難は、誰もが納得するから、ドイツ女性史側とも見解を共有する。が、だからと言って、イギリス女性史はドイツ女性史のような「母性」をただちに対抗言説に掲げるわけではない。イギリスの「母性」への距離の置き方は、結局は、「社会的なるもの」を重んじてきた研究蓄積と系譜に軸足を置いているからであり、ドイツ女性史とは「女の職業」「女の学問」への史資料解説にも違いが出てくる。

つまり、1970 年代から 80 年代を通して盛んであったイギリス女性労働史研

究と、80 年前後から市民女性運動史に注目を寄せるドイツとの違いが、先の「母性」言説の取り扱い方の温度差をもたらしている。1980 年代のドイツ女性史の研究関心は、BDF に代表される市民女性運動に集中し、社会主義女性団体への関心は東独を除けば薄れる。結果的に、市民女性側から発せられる「母性」言説が女性史関連著作で目立つことになる。

ここより、1980 年代のドイツがそうであったように、福祉職創出やソーシャルワーク教育に、過剰に「母性」言説を貼り付けていく背景も読み取れよう。少し遅れて、この影響を直に受ける日本や合衆国では、研究者層の薄さもあり、この間の先行研究分析は欠如したままで、福祉職創出の論拠に「母性」だけを持ち出すことに疑問も出ない。結果的には正が進まない現状にある。

3) 比較ソーシャルワーク教育史から見た場合

つまり、比較ソーシャルワーク教育史から見ると、「母性」と福祉職創出の関係は複雑で、一筋縄ではいかなことがわかる。それだけに両刃の剣であるとか、両義性を持つという女性史/ジェンダー史の従来の指摘に留まらずに、井上の 80 年代末の指摘の如く、「『女の職業』としての社会福祉」労働と（井上 [1989]245）、「『女の学問』としての社会福祉」理論・実践との（井上 [1989]248）、抜き差しならぬ拮抗関係に迫る研究が求められている。ちなみに井上の主たる実践課題は DV であった。ここより、従来の家政学系譜を超越する「女の学問」としての社会福祉理論・実践が目ざされる。当然、曖昧な「母性」言説は廃される。小論とはいえ、80 年代末の日本でも、「女性の経験から紡ぎだされた〔フェミニズム〕思想から、あらゆる人びとの生の可能性が広がるような社会を描き出すことができる」（岡野 [2012]1）、ケア論/対人援助論の模索が始まっていたのである。

すでに 1920 年代のザロモン社会事業・教育論は、合衆国ソーシャルワーク論の第一人者リッチモンドに倣い、「社会的なるもの」に軸足を置く。なお未分化ではあるが、国際ソーシャルワーク教育界で「社会的なるもの」を具現する社会事業・教育論の討議を重ねる中で、社会的公正を目指すヨーロッパ大陸型ソーシャルワーカー像が明確になり始める時期である。それだからこそ、ザロモン

は20年代後半から、その論拠になる社会事業・教育論の執筆に多くの時間を割くのである。

IV-3. グループ活動で学ぶフェミニストたる自覚と処世術

話しをザロモンの内面に戻そう。師シュヴェーリンの知略なくしては考えにくい「呼びかけ」文書の使い分けで、しかもカウアーもそれに先だって同意していたとなると、グループの懐の深さを見る思いがする。フェミニストとしては筋を通したいカウアーでさえも、慈善・博愛事業ではない、社会的援助（社会事業）で活動メンバーを増やす点には異議を唱えない。小異を捨て大同につく。これが初期グループの連帯の在り様で、まずイギリスを、次いで合衆国をモデルにしつつ「慈善・博愛事業から社会事業へ」の運動論を展開し、ドイツ語圏・中欧のソーシャルワーク教育を開拓していく²⁰。

グループも、BDFも、一枚岩ではない。だからこそ、組織を均質に見せるために時に健筆を揮う時もあるが（岡田[2012]33-39）、ベルリン女子社会事業学校が軌道に乗る1912/13年頃には、「母性」言説の定義の曖昧さや、玉虫色の性格にザロモンは自覚的になる。両義性を使い分ける手法ではもはや社会事業・教育論は編めないと、合衆国ソーシャルワーク教育情報から気づく時期でもあった（岡田[2011]6-9）。

グループの「女性解放を取り扱わない」箇所をめぐる文書。無用な政治的なイデオロギー論争を捨て、「無用の長物のような女性教育」の教養主義も捨て去り、社会に役立つ知見・技能を育てる女性教育指針の表明。欧米女性運動は拡大に伴い、前世紀転換期になると、どの国でも実務派リーダーを求め始める。国際組織は特にそうで、社会主義者や「反」フェミニストと堂々と渡り合えるザロモンのような高学歴の若手を抜擢する時代が幕を開ける。イギリスや北米と同様に、女性達は国内では自治体社会行政と連携し、国家官僚にも渉りをつける。両大戦間期に入るや、普通的女性が一定の職業教育を受けた後に、職場進出を果たすことが常態になっていく。

ここに至るまでには、むろんドイツ・フェミニストの苦渋の選択も滲み出る。拠点になるはずのBDF内でも、宗派系女性団体に対しては相当な妥協をザロモ

ン達は強いられる。だが、秘めた怒りをエンパワーメントの糧にし、進取の気概に富むが現実主義者でもあり続ける。現下 EU 諸国の社会政策・社会福祉部門を率いるキャリア女性の生き方を髣髴させるこの一群を、どう命名すればいいのだろうか²¹。やはり、フェミニストと言うべきではないか。たとえ、体制派フェミニストと揶揄されても、である。

V. 結びにかえて — 比較ソーシャルワーク教育史研究のために

以上、日本近現代女性史の「学」の仕組みに目配りしながら、自己言及的な先行研究分析も取り入れてザロモン研究動向を辿ることで、「母性」言説の陥穽がなぜ生じたのかを見てきた。

第二波フェミニズムの残滓と言えるドイツ女性史/ジェンダー史の「母性」言説を脱し、社会福祉の社会的公正を論拠に据える福祉職創出の歴史研究（いわゆるドイツ型「ソーシャルワーク創出」の類型を手がかりとする国際比較）は、まだ始まったばかりである²²。端緒は、2004年6月11日のコロキウムであろう（Feustel[2005]）。そこから A. フォイステルによる『アリス・ザロモン著作に見る社会的なるもののコンセプト（Das Konzept des Sozialen im Werk Alice Salomon）』（Feustel[2011]）も刊行される。同書は、2004年コロキウムで討議された合衆国の社会正義と対比させて、ザロモン著作を詳細に分析、社会的公正に迫ろうとしている。が、ザロモン文書館職員の守備範囲に留まる傾向は否めない。フォイステルの元来の専門は文学・哲学であり、「母性」を換骨奪胎する形で「社会的なるもの」を読みかえて、ザロモン社会事業・教育論が編まれる経緯を、歴史の俎上に載せる試みは避けている。先のコロキウムでも、合衆国とドイツの「社会的なるもの」の違いが指摘されたにすぎない。が、前世期転換期から1950年代までの社会事業・教育論の通史が欠落しているドイツの現状では、これも一つの見識と解される。

ここに日本人がザロモン社会事業・教育論に関与できる条件がある。吉田久一による礎ができている日本とは異なり、ドイツ語圏では歴史テキスト類は充

実しているものの、同一人物・同一系譜による長期的研究はなく、かつ特定の時代・人物を描く社会事業・教育論しかない。吉田のような半世紀にわたる視野で「通史・貧困史・理論史・思想史」を執筆した者はいない。ドイツ語圏では社会教育学の系譜が大学では幅を利かせ、社会政策・社会保険領域と社会事業・教育論との境界も判然とはせず、かつ中堅研究者はおおむね慈善論には疎いから、中項目事典の記載に留まる理論史しか書けず、必然的に研究史上のザロモンの位置づけも難しくなる。ここより、日本社会事業理論史の研究蓄積それ自体が、日独比較の素材になるし (Okada[2008])²³、日本に軸足を置く比較ソーシャルワーク教育史上のザロモン研究の意義も見出せる。

最後に、『人文学報』に「A. ザロモン像再考：ボランティア・グループの二種類の『呼びかけ』を手がかりにして」を皮切りに、5年間にわたりザロモン研究の掲載をし続けた点に、再度、言及しておこう。

これは大学紀要だから、可能であったと思う。ザロモン評伝の原型は大阪市立大学修士論文 (社会福祉学専攻) になるし (岡田 [1976])、2000 年頃までにザロモンに関する論稿はかなり出している (岡田 [1985] 他以降)。しかし、2005 年を節目に、その影響を自身が払いのける姿勢で関連文献を読み直す羽目になる。

たとえ旧稿を寄せ集める著作であっても、仮説提示の論文 (岡田 [1985]) は四半世紀前のものだから、最新研究動向の付記は必要になる。2000 年頃には、それなりに 1990 年代を通じて書き溜めてきたのだから、寄せ集めは可能と思い込んでいた。しかし、この間のドイツ側の「母性」言説の見直しと、その研究進展によって、計画変更を余儀なくされる。さほどに、1990 年代末頃からドイツ語圏社会事業に関する博士論文級の著作刊行が増えていた。水準の高いものも少なからずあった。ザロモン像見直しを余儀なくさせる、「まいった」と思わせた著作は、先に挙げたシュレーダー (Schröder[2001]) である。市民女性主導のボランティア・グループを宗派系と対比させる事例分析によって、女性史側から見た場合の「慈善・博愛事業から社会事業へ」の推移を見事に描き切る好著である。管見の限りでは、これに匹敵するイギリスや合衆国の著作はない。

それだけに、シュレーダー以降のフォローは容易ではなく、回り道をせざるをえない結果になった。しかし、書き直す条件は揃っていたように思う。抜本の見直しがまだできる年齢で、フェミニズム論著作も一通りは読みこなせる研究環境があった。良き助言者にも恵まれた。これに深謝しつつ、『人文学報』でのザロモン研究に区切りをつける²⁴。

(注)

- 1) 所収論文を寄せ集める単著の場合、最初と最後の論文で、齟齬が生じがちである。一定の研究力量を持ってもそうなる（例：田村[1998]）。90年代を通じて筆者がそうであったように、80年代の先行研究を鵜呑みにするリスクも孕む。結果、どうしても最新研究動向が反映し難くなる。つまり、単著刊行が遅れがちなドイツ語圏外（合衆国や日本）では、ザロモンに若干でも言及する女性史著作は、80年代の「母性」言説を脱しにくいのである（例：Allen[1991]; シュテファン/大貫[1991]; 姫岡[1991]; 姫岡[1993]等）。
- 2) 岡田は1985年にザロモン研究で、「母性主義的フェミニズム」を用いる。
- 3) ちなみに「母性主義/母性主義フェミニズム」の代表は平塚らいてうだが、そのフェミニズム類型や名称のルーツは、いわゆる「母性保護論争」に遡る。1984年刊行の香内信子編『資料・母性保護論争』は丹念な資料収集と客観的な解題によって、それ以降の母性保護論争を扱う著作の拠り所となる。が、ボタンのかけ違いもここから始まる。いつの間にか、「いわゆる」も括弧も欠落させた著作が急増するからだ。ささやかな大正期の論争があたかも一大論争であるかのような錯覚も生じる。論争の中心者たる与謝野と平塚の言い分は、実は欧米フェミニズム類型から見れば大差はない。にもかかわらず、女権派と母性派に腑分けされる。これは山川菊枝や山田わかが論争直後からメディアに自己を売り込むべく、二大類型を利用したことも影響する。また帯刀貞代の女性史テキスト（帯刀[1957]）の粗雑な記載も、「母性保護論争」研究の無頓着さを助長した。
- 4) これについては拙稿を参照されたい（岡田[2009]; 岡田[2010]）。筆者は四半世紀近く、アリス・ザロモン大学に定期的に通い、大学内外のザロモンに関わる人々とコンタクトを取ってきた。ここより、徐々に可視化された同校のザロモン以来の伝説ともいえる「学」の仕組みは以下の通り。ザロモンは第二波フェミニストのキャリア・モデルにして、批判対象でもあった。1980年代から90年代前半にザロモン関連の論文・単著を刊行する一群は、メディアと自治体女性政策に関わる女性が多かった。元フンボルト大総長デュルコップ（Dürkop[1990]）や、元ザロモン大学長ラボンテ

(Dürkop/Labonté-Roset[1988])はその筆頭に来る。1980年代半ばからの女性優遇条件を活用し、制度・政策に自説を合わせることに熱心で、その分、言説戦略にザロモン像を巻き込んでしまう。フェミニズム論の取捨選択、大学での立ち位置、さらに女性政策・高等職業教育政策で獲得したい目標等の背景をある程度は把握しておかないと、アリス・ザロモン大学教員の著作をザロモン研究史上に位置づけることは難しい。

- 5) 仔細に先行研究分析をすると、女性史と社会福祉(社会事業)史との立ち位置の違いは分かる。第二波フェミニストが駆使する「母性」言説と、社会福祉理論・実践との峻別に関しては、井上摩耶子「社会福祉とフェミニズム思想」が特筆に値する指摘をしている。若尾書評(若尾[1999])がそうであったように(これは岡田[2010]で詳述)、迂闊にも海外在住の時期とはいえ、井上論文も見過ごしていた。昨年に一読、内容の適格さに驚きを禁じ得なかった。1995年に「ウィメンズ・カウンセリング京都」を立ち上げ、DVを主に扱う方だから、「『女の職業』としての社会福祉」労働と(井上[1989]245)、「『女の学問』としての社会福祉」理論・実践との(井上[1989]248)、抜き差しならぬ拮抗関係に早々と気づけたのだと思う。
- 6) 筆者のようなドイツを主たる対象とする欧米社会福祉(社会事業)史の場合でも、日本の土壌で育まれた思考が仮説設定から検証まで侵入しやすい。だからこそ、女性史に接近する場合、日本型フェミニズムの偏りを意識し、手強い相手になる日本近現代女性史の基本著作を少しは読み返すべきだろう。女性史とフェミニズム論と社会福祉(社会事業)史の三つの研究方法を組み合わせることの難しさは、ジェンダー史の時代になっても変わらない(岡田[2010])。
- 7) 加えて、ヴァイマル期から1950年代までの通史研究が欠けていた点も、「母性」言説一辺倒で福祉職を解釈する傾向を助長した。イギリスの「家庭の天使」も、1930年代に入ると若い世代には見向きもされない。それだけに、「母性」言説の賞味期限が歴史研究によって逆に寿命を延ばす面にも、先行研究分析に際しては注意を払うべきだろう。ちなみに、岡野八代は、「母性主義的なフェミニズム」の脱構築をふまえて、ケアの倫理の社会的可能性を提起する(岡野[2012]166-167)。
- 8) いわゆる第一波フェミニスト世代による19世紀末/20世紀初頭のフェミニズム論は、明らかに初期フェミニズム論とは異なるが、だからといって新規でもない。多くは初期から引き継ぎ、時に対峙的に読みかえるだけ。M.ウルストンクラフトの『女性の権利の擁護』(1792年)には、「母性」言説がかなり散見されるのに、イギリスや合衆国では看過される紹介が目立つ。ドイツ語圏では、「精神的母性」を標榜したがる。が、一部の女性参政権運動を別とすれば、おおむね程度の差にすぎない。第一波世代が前史とする初期フェミニズム論の読み方は、言い切つてよければ、かなりいい加減なのである。戦前日本フェミニズム論よりはましとはいえ、である。

だから、筆者は苦肉の策として 90 年代に「中期フェミニズム」と括った時もある。当時の課題の多くは第二波フェミニズムに継承されるからだ。ただ、ドイツは近隣諸国よりも、1920 年代に活動するフェミニスト世代の遺産継承が少なく、かつ東ドイツの体制擁護の女性運動史叙述も影響して、第一波フェミニズムとの断絶を 1970 年代、80 年代は際立たせる傾向は強かった。やや過剰な「母性」言説でもって、ドイツ女性史通史が描かれるものの、この時代背景の産物。

- 9) 「女子教育は女性教員が適任」と論拠で女子学校教員増大を図る戦略は、1908 年プロイセン教育改革以降も続くから、「母性」言説を延命させるリスクに女性教育史研究も曝されている（例：Neghabian[1993]の『女子学校と女の職業(Frauenschule und Frauenberufe)』）。ザロモンが社会事業・教育論を編む 1917 年以降は、こうした論拠を福祉職にそのまま援用できる状況ではなかった。
- 10) 第二波フェミニスト世代が「母性」言説を是正し難かった副次的要因として、次の三点が指摘できる。まず、福祉国家再編下で、女・子供向け政策を重点課題にする言説戦略と、福祉系大学（特にアリス・ザロモン大学）のアイデンティティ構築の戦略が関わっていた。研究史的には、「母性」言説を福祉国家類型にまで適用していく 90 年前後の合衆国の研究動向が、共時的にドイツ福祉系大学に紹介された（例：筆頭はプリンストン大学にサバティカルで滞在していたザクセ）点も、「母性」言説の是正を遅らせる要因と見ていい。さらに三点目としては、1920 年代の女性団体の活動記録がナチ期に廃棄・散逸していたり、東西ドイツ分断による通史的把握の遅れ等があったからだと思う。ベルリン工科大学の K. ハウゼン（Hausen, Karin）の研究所でも、1945 年以降を扱う研究プロジェクトは 20 世紀末に始まるにすぎないのだから（Zentrum für Interdisziplinäre Frauen-und Geschlechterforschung[1999]）。
- 11) シュヴェーリンがグループの長になるのは 1897 年春。この時点でようやくグループは組織整備を始め、BDF やベルリン・シャルロッテンブルクの自治体行政と協働していく。カウアーは前年にグループ活動を止める（Salomon[1913]13）。
- 12) 文書館のグループ報告書開示は意外に遅れ、全文通読はシュティアヤクールマンはできなかった。
- 13) グループと BDF の結成は、時期的にも、人物的にもベルリンでは重なる。共に、国家に対決する姿勢は回避する点で、当初から穏健的な改革路線をとる。社会保険制度から漏れる女性のための社会政策・社会事業政策の新規開拓を目指す点では、グループと BDF は一致する。運動目標は従来の女性教育拡充策に加えて、社会保険から排除される女性・子供向けの政策、さらに貧困予防のための女性・青少年職業教育に絞り込む。この BDF の支援なくしては、グループの全国結集はもとより、女子社会事業学校設置を全国展開させることも難しかった。
- 14) グループの上部組織 BDF でも、男女が本質的に異質であると公式に提唱はしても、

遵守はされない。共同生活を営むカップルはザロモン周辺に多かったし、それで活動がしにくいことも、BDF 文書を見た限りではない（私生活は出さない文書類とはいえ）。勤勉さと効率という組織の論理が、本質主義に勝る点で、グループの本音と建前の使い分けと似ている。職業自立を求めるフェミニストにとって、「母性」言説は方便でしかなかった。これが J. アダムズに代表される前時期転換期の欧米ソーシャルワーク教育を率いたフェミニストの戦略であった。

- 15) 19 世紀末/20 世紀初頭のベルリンで始まる多様な社会実験が、1970 年代の新しい社会（福祉）運動と通底する側面も看過され、グループが「女性解放」に二の足を踏むのだからと、時には保守派との烙印まで貼り付けられる。筆者も参加したアリス・ザロモン大学 1997 年演習では、学生が読むのはザクセ、フレーフェルト、ツェラー位。少し遡っても、D. ベーターズ (Peters, Dietlinde) の『帝政期の母性主義 — 市民女性運動と女性の社会福祉職 (Mütterlichkeit im Kaiserreich. Die bürgerliche Frauenbewegung und der soziale Beruf der Frau)』(Peters[1984])。開架式図書館で手に取れる文献だけで書くザロモン関連演習レポート・卒論も大半が同レベル。ちなみに、後に「糊と鉄の切り貼り」「編纂風のもの」とザロモンが吐露する 1902 年単著はベーターズが最も多用。
- 16) シンポジウムでは、1990 年 4 月 23 日～4 月 24 日（於：お茶の水大学）での日独シンポジウム講演が、日本では一定の影響があったように思う。同企画が立ち上がるのは、1989 年 6 月。ドイツの報告者は、ザクセとシュティエ論文の二つだけで、母性/ソーシャルワーク/ザロモンの相関を語る（シュティエファン/大貫 [1991]）。入手できるザロモン関連著作が限定されていた 80 年代半ばの典型的なザロモン像の描き方で、それが 90 年代初頭の講演にも及ぶドイツ側の一例。なおここでは、「母性主義フェミニズム」を、館（館・原 [1991]6）と姫岡（館・原 [1991]40-42）が使用。索引には「母性主義フェミニズム」と「ドイツの母性主義フェミニズム」がある。ドイツと日本で、共時的に同一解釈がされる例にもなる。
- 17) 80 年代半ばから「新しい女性史」が京都で模索されるが（荻野他 [1990]9-10）。荻野、落合、姫岡等のフェミニズム論と女性史・家族史を同時並行で研究するメンバーが多いことに気づく。
- 18) 「母性主義フェミニズム」を記した上野論文（上野 [1984]）は、筑波大学図書館ではなく、取り寄せた記憶はない。おそらくはドイツ語文献と、1970 年前後に多読した高群・平塚著作の影響で、ザロモンに「母性主義的フェミニズム」を付けたように思う（岡田 [1985]112,124）。
- 19) なお、今井『イギリス女性運動史』では、「20 世紀初頭に女性と子どものための福祉思想がフェミニズムと結びついた歴史的過程を明らかに」することで、「母子福祉政策への要求は、フェミニズム歴史家の指摘通り、結局性別役割分担意識の定着

に貢献した」との結論を導くが（今井[1992]360）、同時期に姫岡も似た見解の単著を刊行（姫岡[1993]）。今井は、職業自立と母性手当を求める社会主義とフェミニズムの結合の形態も指摘し、これを正統的「社会派」フェミニズムの形成と位置づける。これはザロモン社会事業・教育論とベルリン女子社会事業学校にも適用可能と思うのだが、イギリス女性史では「社会派」フェミニズムに関する研究進展はなく、今井・河村編『イギリス近現代女性史研究入門』索引でも他者引用による一カ所に留まる。フェミニズムの社会民主主義への接近を、ザロモン自身がヴァイマル期に模索するだけに、継続研究の欠如は惜しまれる。

- 20) 社会保険制度が先行する国・地域では、狭義の社会事業に限定して女性動員を図る戦略は説得力があり、社会事業学校や福祉職資格も公的社会事業制度に組み込みやすい。ザロモンもグループとベルリン女子社会事業学校の存在価値を高めるべく、旧い慈善・博愛事業に対峙する「ニュー」言説を用いて、自治体行政と協働しながら新時代の社会事業・教育論を説く。将来のBDF会長との口約束が交わされる時期に書くフェミニズム論は、新旧女性運動とフェミニストの優劣を示す狙いがあった（Salomon[1908]）。社会事業・教育論ではそれほどのポリティクスはないが、19世紀末のイギリスと合衆国の社会事業・教育論が共有する「ニュー」言説の影響はザロモン後半生の著作でも目立つ。
- 21) 邦語文献に限定しても、合衆国ではアダムズを筆頭に、「母性」言説に染まらずに社会改革に取り組むフェミニストがいるし（栗原[2009]）、イギリスでも「社会派」フェミニストと括る著作がある（今井[1992]；大森[2001]等）。日本女性史が女権派と母性派の二大類型で描かれることへの抜本的な疑義も出ている（金子[1999]；三宅[1994]；三宅[2002]；ヴェール[2007]等）。だが、フェミニズム論の実証的な歴史研究が手薄なので、「母性主義」類型を好む土壌に変化は与えられない。もっとも欧米でも、「社会派」フェミニストあるいはソーシャル・フェミニストの研究進展は近年はなく、説得性のある類型は示し難いのだが、ザロモンやアダムズのようなタイプを扱う場合は、一考に値する類型のように思う。
- 22) これに関しては、なお「母性」言説の影響下にあるものの、拙稿「博愛事業思想と中期フェミニズムの二面性 — ドイツ型『ソーシャルワーク創出』への道」（右田紀久恵・秋山智久・中村永司編著『社会福祉の理論と政策』中央法規 2000年9月、215-230）がある。
- 23) 日本の理論史は、欧米から輸入された「社会事業の近代化」言説に無頓着であった。欧米近代社会で鮮明にされる善と正義の二分割、それに対峙するべく登場するフェミニズムと社会的公正との接合関係。これら福祉思想の基軸となるものを、日本の理論史が拾象してきた「学」の仕組みも、日独比較の格好の対象になる。「社会事業の近代化」言説は、拙稿「ドイツ・日本の歴史に見る社会事業理論の現在の争点」

(『人文学報』339号 2003年4月 抜刷増刷, 1-36) で取り上げたが、なお課題は山積みである。

- 24) 1970年代からの国際化の潮流で、戦前 ICW がヨーロッパ大陸女性運動の結節点であった面は弱まると、H. ケルブレは指摘する。これは逆に見ると、ICW と BDF の国境を越えるネットワークの先駆性を示唆する。またケルブレが説明する新しい女性運動の組織機構は、グループと似ている。地域ネットワークで、研修・展示チームに力点を置き、若手が多いとはいえ幅広い年齢層から成り、ローカルでありながらインターナショナルという点で、である (Kaelble/ 永岑 [2007=2010]293-294)。しかし、1909 年からザロモンが ICW で北米フェミニストと連携し、そこで 1920 年代に国際ソーシャルワーク教育界を束ねる人脈づくりをする動きは未解明な箇所が多く、平成 23 年度～27 年度の学術研究助成基金助成金「ドイツ女性団体連合国際ネットワークに見るザロモン研究 — ICW と ICSSW の連携役」で取り上げる。本稿は 5 年計画の 2 年度目の成果。

【主要参考・引用文献】

1. ザロモンに関する岡田個別論文

1) 「母性」言説の影響下で書いたもの — 1970 年代半ばから

岡田英己子 (1976) 「アリス・ザロモンの生涯とその業績 — ベルリン女子社会事業学校の成立過程を中心として」大阪市立大学生活科学研究科社会福祉学専攻修士論文

岡田英己子 (1985) 「ドイツ社会事業成立過程における職業化についての一考察 — ベルリン女子社会事業学校を通して」『社会福祉学』26-1 号, 107-127.

以下、1990 年代以降の拙稿は省略、「母性」言説の影響は 2000 年頃まで続くが、当時でも分析視点は「社会的なるもの (ソーシャルワーク創出)」を重視はしている。例えば、岡田英己子 (2000) 「博愛事業思想と中期フェミニズムの二面性 — ドイツ型『ソーシャルワーク創出』への道」 右田紀久恵・秋山智久・中村永司編著『社会福祉の理論と政策』中央法規, 215-230.

2) 脱「母性」言説の 1990 年代半ばからの研究動向に即するもの

岡田英己子 (2007) 「伊豆合宿の思い出」『社会事業史研究』34 号, 67-68.

Okada, Emiko (2008.10/11) Alice Salomon in Japan : Salomons Ausbildungskonzept auf dem Weg in die japanische Sozialarbeit. Soziale Arbeit, 57 Jg., 10-11/2008, 447-452.

岡田英己子 (2009) 「A. ザロモン像再考: ボランティア・グループの二種類の『呼びかけ』を手がかりにして」『人文学報』首都大学東京都市教養学部人文・社会系 / 都立大学人文学部, 409 号, 1-21.

- 岡田英己子 (2010) 「ドイツ女性史におけるフェミニズムと母性：新たなジレンマ？」『人文学報』首都大学東京都市教養学部人文・社会系 / 都立大学人文学部, 424 号, 19-41.
- 岡田英己子 (2011) 「国際ソーシャルワーク教育年表に見る A. ザロモンの位置 — 比較ソーシャルワーク教育史試論のたたき台として」『人文学報』首都大学東京都市教養学部人文・社会系 / 都立大学人文学部, 439 号, 1-26.
- 岡田英己子 (2012) 「A. ザロモンの初期著作に見る社会政策提言の真意 — 1898 年～1908 年」『人文学報』首都大学東京都市教養学部人文・社会系 / 都立大学人文学部, 454 号, 21-47.

2. 邦語文献

- 有賀夏紀・小檜山ルイ編 (2010) 『アメリカ・ジェンダー史研究入門』青木書店
- 井上摩耶子 (1989) 「社会福祉とフェミニズム思想」大塚達雄・阿部志郎・秋山智久編『社会福祉思想実践の歴史』ミネルヴァ書房, 244-256.
- 今井けい (1992) 『イギリス女性運動史 — フェミニズムと女性労働運動の結合』日本経済評論社
- 今井けい・河村貞枝編 (2006) 『イギリス近現代女性史研究入門』青木書店
- ヴェール, ウルリケ (2007) 「『平等』と『差異』を超えて — 大正初期の雑誌『新真婦人』にみられる『母性』の構築」バーバラ・佐藤編『日常生活の誕生 — 戦間期日本の文化変容』柏書房, 107-145.
- 上野千鶴子 (1984) 「恋愛結婚イデオロギーと母性イデオロギー — フェミニズム・その個人主義と共同主義」『女性学年報』日本女性学研究会, 5 号, 1984 年 11 月, 102-110.
- 上野千鶴子 (1986) 「日本型フェミニズムの可能性」上野千鶴子『女という快楽』勁草書房, 112-131.
- 大森真紀 (2001) 『イギリス女性工場監督職の史的研究 — 性差と階級』慶応義塾大学出版会
- 岡野八代 (2012) 『フェミニズムの政治学 — ケアの倫理とグローバル社会へ』みすず書房
- 萩野美徳・田邊玲子・姫岡とし子・千本暁子・長谷川博子・落合恵美子 (1990) 『制度としての〈女〉 — 性・産・家族の比較社会史』平凡社
- 金子幸子 (1999) 『近代日本女性論の系譜』不二出版
- 栗原涼子 (1993) 『アメリカの女性参政権運動史』武蔵野書房
- 栗原涼子 (2009) 『アメリカの第一波フェミニズム運動史』ドメス出版
- 香内信子編 (1984) 『資料・母性保護論争』ドメス出版
- コーラ・シュティファン / 大貫流敦子訳 (1991) 「ドイツの母性論争と女性運動」館かお

- る・原ひろ子『母性から次世代育成力へ ― 産み育てる社会のために』新曜社, 59-72.
- 住沢 (姫岡) とし子 (1988)「第二帝政期ドイツにおける母性主義フェミニズム ― ランゲとボイマーを中心として」『思想』768号, 47-72.
- 館かおる (1991)「近代日本の母性とフェミニズム ― 母性の権利から産育権へ」館かおる・原ひろ子『母性から次世代育成力へ ― 産み育てる社会のために』新曜社, 3-39.
- 館かおる・原ひろ子 (1991)『母性から次世代育成力へ ― 産み育てる社会のために』新曜社
- 帯刀貞代 (1957)『日本の婦人 婦人運動の発展をめぐって』岩波新書
- 田村雲供 (1998)『近代ドイツ女性史 市民女性・女性・ナショナリズム』阿吽社
- 姫岡とし子 (1991)「ドイツの母性 ― 過去と現在」館かおる・原ひろ子『母性から次世代育成力へ ― 産み育てる社会のために』新曜社, 40-58.
- 姫岡とし子 (1993)『近代ドイツの母性主義フェミニズム』勁草書房
- 姫岡とし子・川越修編 (2009)『ドイツ近現代ジェンダー史』青木書店
- 三宅義子 (1994)「近代日本女性史の再創造のために ― テキストの読み替え」神奈川大学評論集専門委員会編『社会の発見』神奈川大学評論叢書 第4巻, 63-128.
- 三宅義子 (2002)『女性学の再創造』ドメス出版
- 吉澤夏子 (1993)『フェミニズムの困難』勁草書房
- 若尾祐司 (1986)「第一次世界大戦前ドイツにおける市民的女性運動と家父長支配」『法政論集』名古屋大学, 109号, 199-254.
- 若尾祐司 (1996)『近代ドイツの結婚と家族』名古屋大学出版会
- 若尾祐司 (1999)「書評: 田村雲供『近代ドイツ女性史 市民女性・女性・ナショナリズム』」『史学雑誌』108編6号, 100-106.

3. 史資料

- Alice-Salomon-Archiv der ASH Berlin (ASA) ※ 当該文書館の分類は現在は以下の通り
- B. Mädchen- und Frauengruppen für soziale Hilfsarbeit/Frauengruppen für soziale Arbeit
- B.3: Monatsprogramme der Mädchen- und Frauengruppen für soziale Hilfsarbeit 1895-1908

4. 欧米文献

- Allen, Ann Taylor (1991) *Feminism and Motherhood in Germany, 1800-1914*. New Brunswick/ New Jersey: Rutgers University Press.
- Allen, Ann Taylor (2000) *Feminismus und Mütterlichkeit in Deutschland, 1800-1914*. Weinheim: Deutscher Studien Verlag.
- Cauer, Minna (1913) *25 Jahre Verein Frauenwohl, Gross-Berlin. Der Fortschrittlichen*

- Frauenbewegung gewidmet von Minna Cauer zum 25 jährigen Jubiläum des Vereins Frauenwohl, Gross-Berlin. Berlin: W.&S. Loewenthal.
- Declerk-Sachße, Rotraut/Sachße, Christoph(1981) Sozialarbeit und Sexualität. Eine biographische Skizze. In: Sachße, Christoph/Tennstedt, Florian(Hg.) Jahrbuch der Sozialarbeit 4. Geschichte und Geschichten. Reinbeck bei Hamburg: Rowohlt, 345-368.
- DuBois, Ellen Carol(1978) Feminism and Suffrage, Ithaca, NY: Cornell University Press.
- DuBois, Ellen Carol(1998) Woman Suffrage & Women's Right. New York: New York University Press.
- Dürkop, Marlis(1983) Alice Salomon und die feministische Sozialarbeit. In: Feustel, Adriane(Hg.) (1991) Rückblicke. Berlin, 105-128.
- Dürkop, Marlis(1990) Frauen an Fachhochschulen- Perspektiven und Strategien. In: Frauenforschung, Jg. 8, H.3, 1-14.
- Dürkop, Marlis/Labonté-Roset, Chr.(1988) Vom Nutzen des Faches Sozialwesen für die wirtschaftliche Situation der Bundesrepublik, FHSS-info 35.
- Feustel, Adriane(Hg.)(2005) Europa und Amerika: Unterschiedliche Vorstellungen des Sozialen? Zweites Colloquium des Archiv- und Dokumentationszentrums für soziale und pädagogische Frauenarbeit am 11.Juni 2004. Berlin: Alice-Salomon-Fachhochschule für Sozialarbeit und Sozialpädagogik/Pestalozzi-Fröbel-Haus.
- Feustel, Adriane(2011) Das Konzept des Sozialen im Werk Alice Salomon. Berlin: Metropol Verlag.
- Frevert, Ute(1986) Frauen-Geschichte. Zwischen Bürgerlicher Verbesserung und Neuer Weiblichkeit. Frankfurt a.M.: Suhrkamp Verlag. (=1990, ウーテ・フレーフェルト / 若尾祐司・原田一美・姫岡とし子・山本秀行・坪郷實訳『ドイツ女性の社会史 — 200 年の歩み』 晃洋書房)
- Griesehop, Hedwig Rosa/Koch, Gerd/Rätz-Heinisch, Regina(2008) Hochschullehrerinnen und Hochschullehrer erinnern sich. In: 100 Jahre Soziales Lehren und Lernen. Von der Sozialen Frauenschule zur Alice Salomon Hochschule Berlin. In: Feustel, Adriane/ Koch, Gerd (Hg.) 100 Jahre Soziales Lehren und Lernen: Von der Sozialen Frauenschule zur Alice Salomon Hochschule. Berlin: Schibri Verlag, 192-258.
- Kaelble, Hartmut(2007) Sozialgeschichte Europas: 1945 bis zur Gegenwart. München: Verlag C.H.Beck.(=2010, ハルムート・ケルブレ / 永岑三千輝監訳『ヨーロッパ社会史 — 1945 年から現在まで』 日本経済評論社
- Kickbusch, Ilona(1977) Weibliche Dienstleistungen: Was hat Hausarbeit mit Sozialarbeit zu tun? In: Dokumentationsgruppe der Sommeruniversität e.V.(Hg.) Frauen als bezahlte und unbezahlte Arbeitskräfte. Beiträge zur Berliner Sommeruniversität für Frauen. Berlin :

Courage-Verl.

Kuhlmann, Carola(2000) Alice Salomon. Ihr Lebenswerk als Beitrag zur Entwicklung der Theorie und Praxis Sozialer Arbeit. Weinheim: Deutscher Studien Verlag.

Kulawik, Teresa/Sauer, Birgit(1996) Staatstätigkeit und Geschlechterverhältnisse. In: Kulawik, Teresa/Sauer, Birgit(Hg.) Der halbierte Staat. Grundlagen feministischer Politikwissenschaft. Frankfurt/New York: Campus Verlag, 9-44.

Kulawik, Teresa(1996) Modern bis maternalistisch. Theorien des Wohlfahrtsstaates. In: Kulawik, Teresa/Sauer, Birgit(Hg.) Der halbierte Staat. Grundlagen feministischer Politikwissenschaft. Frankfurt/New York: Campus Verlag, 47-81.

Landwehr, Rolf(1981) Alice Salomon und ihre Bedeutung für die soziale Arbeit. Ein Beitr. zur Entwicklung der sozialen Berufsarbeit und Ausbildung anlässlich des 10-jährigen Bestehens der FHSS Berlin. Berlin :FHSS.

Lüders, Else(1925) Minna Cauer. Leben und Werk. Dargestellt an Hand ihrer Tagebücher und nachgelassenen Schriften. Gotha/Stuttgart: Verlag Friedrich Andreas Perthes.

Maier, Hugo(Hg.)(1998) Who is who der Sozialen Arbeit. Freiburg im Breisgau: Lambertus Verlag.

Neghbian, Gabriele(1993) Frauenschule und Frauenberufe. Ein Beitrag zur Bildungs- und Sozialgeschichte Preußens (1908-1945) und Nordrhein-Westfalens (1946-1974). Köln/Weimar/Wien: Böhlau Verlag.

Peters, Dietlinde (1984) Mütterlichkeit im Kaiserreich. Die bürgerliche Frauenbewegung und der soziale Beruf der Frau. Bielefeld: Kleine Verlag.

Peyser, Dora(1958) Alice Salomon : Ein Lebensbild. In: Muthesius, Hans(Hg.) Alice Salomon: Die Begründerin des Sozialen Frauenberufs in Deutschland. Köln/Berlin : Carl Heymann Verlag, 9-121.

Sachße, Christoph/Tennstedt, Florian (Hg.)(1981) Jahrbuch der Sozialarbeit 4. Geschichte und Geschichten. Reinbek bei Hamburg : Rowohlt

Sachße, Christoph(1986) Mütterlichkeit als Beruf: Sozialarbeit, Sozialreform und Frauenbewegung 1871-1929. Frankfurt a.M.: Suhrkamp.

Salomon, Alice(1908) Die Entwicklung der Theorie der Frauenbewegung: Literatur zur Frauenfrage. In: Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik. 26.Bd., Nr. 2., März 1908, 451-500.

Salomon, Alice(1913) Zwanzig Jahre Soziale Hilfsarbeit. Karlsruhe: G.Braunsche Hofbuchdruckerei u. Verlag.

Salomon, Alice(1928) Jugend- und Arbeiterinnerungen. In: Kern, Elga (Hg.) Führende Frauen Europas. In sechzehn Selbstschilderungen. München: Reinhardt, 3-34; Auszüge in: Bettina

- Conrad u. Ulrike Leischner (1999) (Hg.) Führende Frauen Europas. Elga Kerns Standardwerk von 1928/1930, München/ Basel: E.Reinhardt, 108-121 (=1938, アリス・ザロモン著 / 池川清訳「後編 自叙傳（續）— 生い立ちと女子社会事業人養成の使命」『社会事業研究』26 卷2 号, 43-57; 26 卷4 号, 53-62) dazu In: Feustel, Adriane (Hg.) (2004) Frauenemanzipation und soziale Verantwortung: Ausgewählte Schriften. Band 3: 1919-1948. Neuwied/Kriftel/Berlin: Luchterhand, 383-403. (略記 Ausgew.Schr., Bd.3)
- Salomon, Alice/ Wieler, Joachim (1983) Charakter ist Schicksal: Lebenserinnerungen. (Aus dem Englischen übersetzt von Rolf Landwehr, hg.von Rüdiger Baron und Rolf Landwehr. Mit einem Nachwort von Joachim Wieler) Weinheim/Basel: Belz Verlag.
- Schröder, Ihris (1994) Soziale Frauenarbeit als bürgerliches Projekt: Differenz, Gleichheit und weiblicher Bürgersinn in der Frauenbewegung um 1900. In: Tenfelde, Klaus/Wehler, Hans-Ulrich (Hg.) Wege zur Geschichte des Bürgertums. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 209-230.
- Schröder, Ihris (2001) Arbeiten für eine bessere Welt: Frauenbewegung und Sozialreform, 1890-1914, Frankfurt: Campus.
- Simmel, Monika (1978) Mütterlichkeit- ein feministisches Programm? In: Beiträge 3. Sommeruniversität von und für Frauen. Berlin.
- Simmel, Monika (1981) Alice Salomon: Vom Dienst der bürgerlichen Tochter am Volksganzen. In: Sachße, Christoph/Tennstedt, Florian (Hg.) Jahrbuch der Sozialarbeit 4. Reinbeck bei Hamburg: Rowohlt, 369-402.
- Soden, Eugenie (1914) Stellung und Aufgaben der Frau im Recht und in der Gesellschaft, Stuttgart.
- Stoehr, Irene (1983) „Organisierte Mütterlichkeit“. Zur Politik der deutschen Frauenbewegung um 1900. In: Hausen, Karin (Hg.) Frauen suchen ihre Geschichte. Historische Studien zum 19. und 20. Jahrhundert. München: C.H. Beck, 221-249.
- Stoehr, Irene (1997) Alice Salomon. In: Hülsbergen, Henrike(Hg.) Stadtbild und Frauenleben, Berlin: Stapp Verlag, 75-103.
- Walser, Karin (1976) Frauenrolle und soziale Berufe – am Beispiel von Sozialarbeit und Sozialpädagogik. In: Neue Praxis, 6 Jg., Heft 1, 3-12
- Zeller, Susanne (1987) Volksmütter: Frauen im Wohlfahrtswesen der zwanziger Jahre. Düsseldorf: Schwann.
- Zentrum für Interdisziplinäre Frauen- und Geschlechterforschung (Hg.) (1999) Bericht Winter 1996/97 bis Sommer 1999, TU Berlin.

